

有田の陶磁史 (95)

前回は、昭和9年(1934)の石割松太郎著『祥瑞の研究』から、“「呉須権兵衛」を再吟味せよ”の一節に入ったところでした。彩壺会発行の『柿右衛門と色鍋島』からの引用文を記したところでしたので、本日は、いよいよそれに基づく石割説の部分です。

「如上の記載の中、酒井田家の旧記録の言句の形を、そのままに存するものと思はるるを抽出すると、

「「圓西は明人ゴスゴンベイを聘し」

「元和二年」

との二句が、旧記そのままの記載だと思はれる。現に北島栄助氏著『日本陶器史論』二一二頁にも「元和丙辰の年」とあって、酒井田家記録に拠る旨の註記があるのに徴して、かう断定してもよからう。

ところで、問題は「明人ゴスゴンベイ」だ。彩壺会では「呉須権兵衛」と註記してあるが、一体何の根拠あって、かういふ漢字が当てはめられたのであろう？考へてみる。

「明人」と断りながら「呉須権兵衛」といふからは、これは、明らかに明における姓名でなくして、日本における綽名(あだな)とも解さるるが、それならば、何故古記録に「ゴスゴンベイ」と片仮名で記されてあるのだからかを、一応疑ってみる。即ち「呉須権兵衛」と漢字を彩壺会が当嵌めたのか。何かの前人の典拠があって、彩壺会がソレを踏襲したのかが問題である。

按(おも)ふに、前掲の「喜三右衛門」文書(「赤絵初りの覚」)には、「こす権兵衛」とあるに見て、彩壺会ではこの紛失した記録の分の「ゴスゴンベイ」に註記したのは、この喜三右衛門文書によったものだらうと推定される。

が、喜三右衛門文書をソノまま何の省察もなく踏襲していいだらう？ — 問題はこれだ。従って彩壺会の言ふ「呉須を売買する商人」云々の如きは、屋上徒らに無駄な屋を架する贅言(無駄な言葉)だ。昔から来る一片の空想に過ぎない。

酒井田家の旧記録の他の部分の例を見ると、「しいくわん」「かうじ町」「かりあん」「おらんだ」「どうほふ」など、特別の時に仮名を用ひて権兵衛、太兵衛の如き場合に仮名を用ひた例がない。旧記を見ないで判断するのは、早計に失するやも知れないが、

ゴス。ゴンベイ(呉須権兵衛)

ゴ。スユンズイ(呉祥瑞)

と並記してみると、ここに何らかの誤読か、孟浪杜撰(まんらんずさん/杜撰の強調表現)の書き方が、存してあるのではないか。私はこの旧記録を「呉祥瑞」と読み、祥瑞五郎太夫の影響が、柿右衛門の赤絵付に及んだものだと考へたい。」

すごいですね。大胆というか、ついに呉須権兵衛を呉祥瑞にしてしまいました。それで、柿右衛門の赤絵も祥瑞の影響ですか…？祥瑞は日本磁器自体も創始して、続いて赤絵の開発にも関わって、まさに八面六臂の大活躍ですね。さすがに、「ゴ。スユンズイ(呉祥瑞)」とは、凡人には思いもよらない豊かな発想ですね。でも、これがまだオチじゃないですよ。続きがあるんですが、また次回。(村) R1. 7. 26

有田の陶磁史 (96)

前回は、昭和9年(1934)の石割松太郎著『祥瑞の研究』から、“「呉須権兵衛」を再吟味せよ”の一節をご紹介していました。ついに呉須権兵衛を「ゴ。スコンズイ(呉祥瑞)」にしてしまったところでした。こういうぶっ飛んだ説、好きなんですよ。この方の説は、まるで例の北島似水説なみの妄想度が興味をそそられます。前回の部分で、現に北島栄助氏著『日本陶器史論』に書いてあるみたいに引用されてましたので、読んでるはずですよ。さぞや、波長が合ったでしょうね。

実は前々回彩壺会の『柿右衛門と色鍋島』の引用は、最後は「圓西は『元和の初(二年)』有田南川原の地に来り住み、其子酒井田喜三右衛門は已(すで)に製陶を志し窯を築いて居ったが当時支那は明末で窯業の盛時である云々」という書き方で終わっています。しかし、実際には引用元は「云々」で終わっているわけではなく、別の文章が繋がっています。実は、この「云々」で止めたところがミソで、その続きには、石割説の呉祥瑞とは別の人物が入るのです。続きを記してみます。

「其頃の作品、所謂万曆赤絵の如き精巧のものは、日本では出来なかつたのである。

然るに圓西は、兼々筑前博多の承天寺の住職某と、友として好かつた。偶々流れ流れて、此承天寺へ落ちて来た、竹原五郎七(高原五郎七)と云ふ者が、染付磁器の製法に悉くはしく、此住職の紹介に依りて、五郎七が種々圓西の子喜三右衛門に教へて、始めて酒井田家の窯から、支那磁器にも劣らざる、立派の青華磁器が出来たと謂はれて居る。」

つまり、喜三右衛門が磁器をはじめた頃は、まだ万曆赤絵のような精巧なものは日本では作ることができなかったが、高原五郎七が教えて、中国にも劣らないような立派な染付磁器ができるようになったと言われているって書いてあります。

これは、磁器の製法を教えたのは、「ゴ。スコンズイ」の方じゃなくて、高原五郎七の方ってことですよ。そりゃ、そこまで引用すると話しがややこしくなるのは分かりますけど、ここも無視せずに、ちゃんと叩いて、磁器の創始も赤絵の創始も、「ゴ。スコンズイ(呉祥瑞)」ってことにしといてもらわないと、ちょっと狐につままれたような気分です。

まっ、この方はこんなもんじゃなくて、もっとうわてですけどね。この後、「居士五郎太夫」と「祥瑞五郎太夫」の二人の五郎太夫を創り出した驚きの手法を再び繰り出すことにはなりますが、長くなるのでまた次回。(村)

R1. 8. 2

有田の陶磁史 (97)

前回は、昭和9年(1934)の石割松太郎著『祥瑞の研究』から、“「呉須権兵衛」を再吟味せよ”の一節をご紹介していました。『色鍋島と柿右衛門』の引用の中から、高原五郎七が喜三右衛門に磁器の製法を教えたって部分をカットして、「ゴ。スコンズイ(呉祥瑞)」にすり替えました。そして今日は、そうした上で、こうきましたかって部分です。二人の五郎太夫を創造した方なんですから、なんか想像付きませんか？

「もう一つこの両旧記録、一 即ち紛失した記録と、「喜三右衛門」文書(赤絵初りの「覚」)とを比較してみると、「明人ゴスゴンベイ」とある場合は、柿右衛門の父圓西時代で、記録が明示する元和二年である。然るに

一方「ゴス権兵衛」（正確には「こす権兵衛」）といふ「喜三右衛門」文書のは、初代柿右衛門が、赤絵付の工夫を完成した正保三年を遡る一、二年前の事実で、「其後段々某工夫仕こす権兵衛兩人にて付立申候」とあるから、「明人ゴスゴンベイ」の時代とは二十七八年の距りがある事を忘れてはならぬ。或は圓西は、呉祥瑞を聘し、初代柿右衛門は柿右衛門は呉須権兵衛なるものを相談相手としたもので、こゝに問題の人物は、二人ではあるまいか。

更らに酒井田家系譜を見ると、右の元和二年は、圓西四十三歳（天正二年生）、初代柿右衛門は二十一歳（慶長元年生）であった。祥瑞五郎太夫は、四十歳（天正五年生）で、大明から帰朝したのであるが、かうして祥瑞と酒井田家は結ばれた。即ち酒井田家は「呉祥瑞を聘して」青磁及呉須焼の方を伝へたものであらう。」

予想はしてたと思いますが、やっぱり「ゴ。スコンズイ（呉祥瑞）」と「呉須権兵衛」を別人にしてしまいましたね。「ゴスゴンベイ」と「こす権兵衛」の記述の違いから、ここまで妄想するのですから、さすがです。石割祥瑞説はなかなか複雑でしたが、最後に要点をまとめられていますので、記しておきます。

「（一）祥瑞は陶磁史家の言ふ如く、永正十年に僧桂梧と大明から帰朝した居士五郎太夫とは、同名異人である。

（二）この永正の伊藤五郎太夫の一門の出身で、約百年の時代を隔て出た祥瑞、伊藤五郎太夫は単に陶工である。

（三）そして日本へ、この人が景德鎮の磁法を始めて伝へた。

（四）これが日本の白磁青華の嚆矢であるから、従来磁祖と考へられた朝鮮陶工李参平は、鍋島家調査書に誤り伝へられた傀儡に過ぎない。瓷祖は、儼として呉祥瑞、伊藤五郎太夫である。

（五）従って日本の磁法は、朝鮮系統の陶法の自然発達に拠ったものではなくして、景德鎮系統の磁法が、磁法として正統に伝へられた支那系統である。」

なるほど、（五）あたりは、当たらずしも遠からずってところですね。日本磁器は、当初から李朝磁器に見えないように、中国の技法も加えて、なるべく中国風に見えるように作っているわけですから。

ということで、これで祥瑞説の最後の打ち上げ花火のご紹介を終わりたいと思います。この後には、もう祥瑞説が浮上することはありませんでした。（村）R1. 8. 9

有田の陶磁史（98）

前回まで、昭和9年（1934）の石割松太郎著『祥瑞の研究』により、昭和最後の祥瑞磁器創始説の大打ち上げ花火をご紹介したところでした。以後は、もう祥瑞説は出てきませんので、少し時期は下がりますが、完全にこの説の息の止まった説まで一気にお話ししておくことにします。

それは、昭和47年（1972）の齊藤菊太郎著の『陶磁大系』第44巻、「古染付・祥瑞」です。

「シヨンジの銘文解説」とした項目で、「銘文の誤読」として中川忠良『桂林漫録』（寛政12年（1800））で、本来「五良大甫」と書かれているものを「五良太輔」とし、さらに五良太夫（ごろだう）と訓読で誤読していると記します。また、稲垣休叟『茶道筌蹄』（文化3年（1806））では、「五郎太夫と書くはあしく、五良太甫と書くべし」とはしていますが、やはり五良大甫を日本人陶工と見なし、祥瑞は中国の地名と解釈していることが記されています。さらに、金森得水『本朝陶器考証』（安政4年（1857））では、これをゴチャゴチャにして、「五良太甫は生国伊勢飯高郡大口村の産にて伊藤五郎大夫の次男なり、今も同所に伊藤あり、明末祥瑞へ渡り、焼物をなし、其後帰朝す。桂林漫録に詳なり」として、ついに五郎大夫と五良太甫は父子になって、五良太甫は中国の祥瑞という場所で焼物を覚えたことになってしまいました。

そして、近代以降も、やっぱり出ましたが、「昭和四年刊の『祥瑞の研究』（石割松太郎著）では、祥瑞を伊藤五郎太夫と名のった陶工であると見なして、伊勢松坂に墓所があると考証した。中国から帰朝後、景德鎮の磁法を初めて日本に伝えた人で、いわばわが国の「瓷祖」であるべきとした。同じように昭和一五年刊の『定本古九谷』では、著者松本佐太郎氏はその巻頭で、古九谷窯の開窯にふれて、後藤才次郎は肥前に至って、はからずも祥瑞五郎太夫の助力を得て、ともに帰国し、明様五彩の磁器を創製するに至ったと述べている。いわば仮空の人物五郎太夫を登場させた戯作と変わるところはない。決して笑えぬ話で、残念ながらこれが江戸以来一般に根ざした祥瑞解釈であった。」としてそれまでの祥瑞研究をバツサリと切りつつ、まとめています。

そして、引き続き製品の「五良大甫 呉祥瑞造」銘の意味を詳細に記されていますが、長くなるのでまた次回にします。（村）R1.8.16

前回は、昭和47年(1972)の齊藤菊太郎著の『陶磁大系』第44巻、「古染付 祥瑞」の中から、「シヨンズイの銘文解説」とした項目中、「銘文の誤読」とした、近世・近代の無理やり日本人名にしたりした誤読の部分について記しました。今日は、いよいよ“「五良大甫 呉祥瑞造」の意味”と題された部分です。

ただ、一文字一文字丁寧に説明されていますので、逆にかなり頭の中がこんがらがりそうな内容になっています。ですから、ちょっと要点だけを抜き出してみようと思います。

「甫」がミソみたいですね。これは元来「父」と同字で、今は漢音で「フ」と発音しますが、古くは呉音で「ホ」だったそうです。両方の字とも同音同義で、いずれも元は「男子の美称」だそうです。さらに「甫」はこの男子の美称から転じて、字(あざな)または呼び名の末尾に用いられたそうです。

どうです？もう少しややこしいでしょう…。続けます。

それで、字(あざな)の下に「甫」を付けて一般に用いたのは、宋代にはじまり流行したそうです。元来は、宋代の王安石(北宋の政治家・詩人)の「介甫」のように字の末尾に甫字を取り入れて字とするのが正式ですが、後世の人は字の下にさらに甫を加えて、父に替えたりもして使ったそうです。中国の正しい署名方法は、まず貫籍(本籍)、その下に号、姓、字の順で書くのが正しいのですが、祥瑞製品が作られた明末の天啓・崇禎の頃には相当乱れていたといえます。

まだ続きますので、ちょっと頭を整理してくださいね。

この「甫」の用法は、日本でも取り入れられたそうです。たとえば、小堀遠州の字は「宗甫」で、これは正しい使い方です。現代の茶道や華道で「□甫」の名が使われるのは、ここからきているそうです。これで「甫」は終わりました。

次に「五良大」です。これが呼び名に相当します。この中で「大」は明代の俗称だと長男の意味だそうです。ただ「五良大」のような3文字の用例は本来のものではないようですが、正しい用例を知らない庶民が書いたような陶枕の裏に墨書で書いた「李五大」の例があります。これは李姓の五男の家の長男の意味だそうです。ここから、「五良大」は呉家の五男の家の長男となるのだそうです。「李五大」とはちょっと読み方が違う気がするんですが、「良」はどこいったんでしょうね？

まあ、考えてもわかりませんのでほっときますが、滴翠美術館蔵のシヨンズイ詩入鳥摘蓋の薄茶器には唐詩五絶三章が胴部に書かれており、その末尾に「呉人職」、「五良大甫呉祥瑞造」と書かれています。この場合、

「呉(人職)」=貫籍

「祥瑞」=号

「呉」「五良大甫」=姓・字

になるんですかね？よく分かりませんが…。

とりあえず、結局「五良大甫呉祥瑞造」の意味としては、「呉家の五男の家の長男である祥瑞の造」となるってことです。

でも、よくよく考えてみると、祥瑞を輸入して使っていた当時の人々は、それが中国製品だって分かっていたはずですから、日本人陶工説なんて出てきたのは、やはりもうそのことが完全に忘れ去られた江戸後期のことなんでしょうね。

そして今…。逆に日本人陶工説の方が忘れ去られてしまっています。斉藤説が発表された昭和 47 年には、まだそういう説が知られていたってことでしょうか、まだ 50 年もたっていないですけどね。いや、あの石割説の出た昭和 4 年からでも、まだ 90 年です。別の説が走り始めると、案外元の説などは、人の記憶から廃れるのは早いようですね。長かったですね、ようやくこれで次から昭和の朝鮮人陶工説に入れます。（村）R1. 8. 23

有田の陶磁史（100）

ついにこの「有田の陶磁史」シリーズも三桁の 100 回を数えることになりました。たしか(50)の頃に、三桁に達するまでには一世紀くらいは進んでいたいと淡い期待をいただいていたようですが、今は昔。(46)からこの磁器創始者シリーズやっていますが、まだ同じことをやりました。一世紀どころか、ピクリとも動いてません。(46)といえば、今年の 7 月 6 日にアップしてますので、もう一年以上続いていることになります。我ながら、恐るべしです。

祥瑞説が一とおり片付いたので、本日から、いよいよ昭和の朝鮮人陶工説、つまり李参平説ですが、これに入っていきたいと思います。ここまできたら、もう一息です。油断はできませんが…。

ただ、もう今までの流れをお忘れではないでしょうか？50 回以上も似たようなことを書いてるわけですから、覚えていられるはずありません。自分でも忘れてます。ということで、簡単におさらいしてみます。

肥前の陶磁器については、陶器もそうですが、磁器についても、そもそも江戸後期に中央の茶人や好事家の間で流布していた説と、地元に残る古文書によってゴニョゴニョする説というのが混じり合うこともなく、淡々と並立していました。そして、ほかの産地は知りませんが、唐津焼も伊万里焼もこの平行期を経て、明治時代頃からそろそろバトルがはじまります。

ただ、正確に言えば、陶器の方はあまりに中央と地元の両サイドとも資料がショボ過ぎて、同じ土俵には登ったものの、ほぼ一戦も交えることなく、昭和初期を迎えています。しかし、磁器の方は、これまで見てきたように明治に入ると、さまざまな妄想がはじまります。

こうした両サイドの説を少し混ぜるきっかけとなったのが、明治 10 年(1877)の黒川真頼著『工芸志料』でしょうか。これは翌年の第 3 回パリ万国博覧会の日本からの出品作を紹介するために出版されたもので、これによって、少し陶磁史熱にも火が付きまして。

唐津焼については、それまで“奥高麗”や“米量”、“根抜”ほか、名前の付けられていたやきものの種類に、はじめて具体的な製作年代が冠されました。たぶん“奥高麗”くらいは耳にする機会はあると思いますが、“米量”や“根抜”となると、茶道に通じている方か、よほど唐津焼の歴史に詳しい方だろうと思います。その前に、多くの方は読めないとは思いますが…？一見、字面だけ見ると、いかにも雅味に富んだ奥深いネーミングのようにも思えますが、実に下らないたわごとです。でも、今回は唐津焼の話しじゃないので、ガマンしてこれ以上はやめときます。とりあえず、根拠がまるで不明ですが、年代が付いたので、突っ込みどころができたってことです。

磁器の方は、この時、李参平がはじめて全国デビューを果たします。それで、ここから例の祥瑞とのガチンコ勝負がはじまるわけです。（村）R1. 8. 30

有田の陶磁史（101）

前回から、日本磁器朝鮮陶工説について、軽く振り返っているところでした。

明治10年（1877）の黒川真頼著『工芸志料』で全国デビューを果たした朝鮮陶工李参平ですが、それによって、江戸時代のように祥瑞説だけを記載する著述はほとんどなくなり、だいたい並記されるようになりました。ただ、最初の頃は、両者の関係に触れるでもなく、ただ並記するだけということも珍しくありませんでした。では、明治の人は祥瑞と朝鮮陶工の関係をどう捉えたのか？

まず、前提として、祥瑞が日本人陶工であることを疑う著述は、知る限り皆無です。おおむね、選択肢は二つ。磁器創始が祥瑞だと信じる人と、疑いながらも抹殺できない人。でも、次第に何となく絡みあうようになり、明治13年（1880）の『東京日々新聞』などのように、祥瑞と朝鮮陶工二段階磁器創始説なんてのも出てきました。この頃には、もう、うすうす祥瑞不利かなって考える人が多くなってきていましたので、この新聞記事は起死回生です。また、ちょっと盛り返すかに思えたのです。

ところが、これに速効でかみついたのが久米邦武氏でした。『有田皿山創業調子』で、「明治十三年東京日々新聞雑報中二有田皿山創業誤謬ノ調子」として、祥瑞説に異論を唱えたのです。

ところで、この『有田皿山創業調子』について、例の昭和の祥瑞説の雄、『祥瑞の研究』の石割松太郎氏の見解を覚えてらっしゃるでしょうか？この李参平説は「磁祖を藩主鍋島直茂が開いた窯の功に帰せんがための政治的史実」として、鍋島侯爵家と旧藩臣による陰謀だと唱えました。さぞ悔しかったんでしょうが、この久米説を「お茶坊主史実」とまで断じています。では、なぜこの久米説を、こんなに目の敵にしたのでしょうか？それには、次のような訳があります。

「御怠屈さま！永々と、私は鍋島家の調書を引用した。或は必要以上に詳細に引用した所以は、前掲の如くこの有田地元の鍋島家の調査が、祥瑞に関して重要性を帯びこの調書が、明治十三年、同十四年、同十九年と三度に亘って世間に公表されて「祥瑞」が殆んど抹殺された。そしてその後の日本陶磁史家が、殆んど悉く、この鍋島家の調書を根本資料として採択するに至った事は、日本陶磁史の柱脊を歪める唯一の論拠を為してゐる事に思及んで、鍋島家の調書を、十分に日本陶磁史のために検討せんがために、諄（くど）い程私は引用したのである。」

以上のように、『東京日々新聞』で盛り上がりかけた祥瑞説の火を、一気に消し去ったのが『有田皿山創業調子』だったわけです。（村）R1.9.6

有田の陶磁史（102）

前回まで、日本磁器朝鮮陶工創始説について、軽く振り返っているところでした。そして、せっかく『東京日々新聞』で祥瑞説が一息付いたのに、久米邦武著の『有田皿山創業調子』がぶっ潰してしまっただけで済んだところまででした。

あの祥瑞説の石割さんも、あれがなかったらもっと展開が違ってただろうに思ってたに違いありません。でも、石割さんの怒るような、鍋島侯爵家と旧藩臣による陰謀とまでは言いませんが、確かに明治、大正頃の朝鮮陶工説ってのは、ちょっとインチキくさくはあります。だって、五郎太夫という陶工がいたこと自体は信じられていたので、祥瑞磁器創始説を特に肯定する材料もない代わりに、否定する材料もなかったわけですから。です

から、『有田皿山創業調子』の祥瑞の否定にしても、大して説得力のある論が組み立てられたわけではありません。

「一、祥瑞の帰朝年度（永正十年）と肥前磁器創始年度（元和二年）とは約百年の隔りがある。

一、祥瑞に関しては藩史は勿論、該地の口碑伝説にも伝えられて居ない。

一、肥前有田の地は磁器創始の元和初年頃に於てすら僅かに樵夫の行来する極めて辺鄙溪谷であったのに百年を遡る永正時代に他国人の祥瑞が此処へ来て陶業を営む訳なし。」

って、具合です。だから、何だっていうんでしょうか？まあ、朝鮮陶工とは繋がりが無いのではという説明くらいにはなっても、祥瑞自体の否定にはなってません。これで当時の研究家諸氏がこぞって朝鮮陶工説になびいたなんて、本当かなって思ってしまうですね。やっぱ、近代歴史学の先駆的大家である久米邦武ブランドなんじゃないですか？それなら、今でもありそうですが…。

まあ、祥瑞の否定ってもせいぜいこんな程度なので、朝鮮陶工説側が取った最高難度の究極の作戦は、ガン無視です。祥瑞の話しなんぞ知らないって感じで。ただ、それも大人げないので、もっと高度な作戦で臨んだのが、祥瑞は陶工ではなかった作戦。まさに、何でもありです。しかし、祥瑞説側も黙ってはいません。よせばいいのに、ちょっと盛りすぎてしまう人がちらほら。たとえば、ほら、“古日本”でしたか？祥瑞が作ったってやつ。“Old Japan”、ヨーロッパなどに輸出された古伊万里のことですね。祥瑞に輸出用の古伊万里まだ作らせたなら、さすがに話し盛りすぎでしょう。

最後の最後に石割さんが、二人の五郎太夫説で盛り上げてくれましたが、それに、「ゴ。スコンズイ（呉祥瑞）」でもがんばりました。

ただ、実質的には、それ以前の大正6年（1917）に、陶祖李参平の三百年祭の一環として建てられた「陶祖李参平之碑」で勝負アリでした。何しろ、李参平の碑ですから、祥瑞のことなんて、何も触れられていません。究極の祥瑞ガン無視作戦です。さすがに、これを常時人目に触れる山のとっぺんに建てられたら可哀相です。形式上は、地元民の総意です。以後は、もう地元の力が強くて、事実上、全国区の説の方が追随する形になってしまいました。

そして、いよいよ昭和です。（村）R1.9.20

有田の陶磁史（103）

今回から、いよいよ昭和の朝鮮陶工磁器創始説に入りたいのですが、その基点ともいべき、大正 年（1917）の『陶祖李参平之碑』の内容について押さえておきたいと思います。ちなみに、原文については（69）をご確認ください。

要点を箇条書きしてみると、

- ・陶祖李参平。
- ・朝鮮忠清道金江出身。
- ・慶長元年に連れ帰って多久安順に預けられた。
- ・金江の人なので、金ヶ江姓を与えられた。
- ・最初は多久で製陶したが良土がなかった。

- ・元和年間に有田郷乱橋に来て製陶。
- ・泉山で磁石を発見し、白川に移住して、磁器を製出。
- ・それ以来、製法を継承して今の繁栄に至った。

これによると、慶長元年に多久家に連れ帰られた李参平は、忠清道金江の出身で、元和年間に有田の乱橋に移住して、その後泉山で陶石を発見して、白川に移住して磁器をはじめたこととなります。慶長の役は2年からのので、文禄の役の際に連れ帰られたということを示しています。少なくとも、当時鍋島家の釜山退陣は文禄三年と考えられており、帰陣が文禄5年、つまり慶長元年とされていました。ただ、今では忠清道金江は、忠清南道の鶏籠山あたりってことにされてますが、「???」です。ちなみに、鍋島軍は、文禄の役の際には、忠清北道は通過していますが、南道の方は通ってなかったような…。かと言って、慶長の役の際には、たぶんその下の全羅北道までしか行ってないと思うんですが、そこらあたりはとりあえず置いておきます。

これをかつてのテッパン通説「元和2年に、朝鮮人陶工李参平は、泉山で陶石を発見し、白川天狗谷で日本初の磁器を創始した」と比べてみると、まだ磁器の創始年がないことと、「天狗谷」という地名が出てこないことが違います。

元和2年という説は、この頃にはまだなく、たまに元和2年と根拠もなく書いたものもありますが、おおむね元和から寛永説が唱えられていました。また、天狗谷の地名が出てこないことについては、金ヶ江家の文書にはありますので、うがった見方をすれば、この当時、まだ違った創始窯説もありましたので、多少はそれを意識したのかもしれませんが、それは、武雄市山内町の百間窯説で、例の北島似水さんに、明治時代にずいぶん妄想を働かせていただいたところですよ。

実際に、この2説に何とか整合性を図るべく昭和8年(1933)の『陶器全集』では、寺内信一氏が「有田事業史」の中で次のように述べられています。

「三兵衛白川に移住後、百間窯を経営したことに就ては、後の史家が不審がり、中には百間窯が白川より前に焼かれたと想定するものがある。然し磁器は原料のみでは焼造は出来ない、築窯及び焼台等多くの焼成器具を造るべき耐火材料がなくてはならぬ。故に最初は此の耐火材料を板の川内より運搬したものゝやうで、其の後中樽土及び白川山赤土等の発見によって不完全ながらも窯具の間に合はせたものらしい。」

つまり、百間窯のある板ノ川内を、築窯や窯道具の粘土採取地にしてしまったわけです。ただ、本当は、百間窯説なんて、ほっときゃいいんですけどね。別に古くから伝わっていることではなくて、以前触れたように似水さん由来ですから…。(村) R1. 9. 27

有田の陶磁史 (104)

昭和の磁器創始朝鮮人陶工説、つまり李参平説について、お話ししはじめたところでした。この昭和というのは、出版物も格段に増えますので記すことが多いと思いきや、早々に説が固まってしまい、どれを取っても金太郎飴状態になるので、それほど記すことがありません。もともと中央の茶人・好事家で唱えられた祥瑞説も石割松太郎説で潰れてしまい、完全に地元説の圧勝です。これまでのように、祥瑞説と朝鮮陶工説が並記されることもなくなり、朝鮮陶工説の中での微調整に過ぎなくなります。

この通説の誕生にやはり最も大きな影響があったのは、昭和 11 年（1936）刊行の中島浩氣『肥前陶磁史考』と
考えて間違いありません。この書籍についてはご存じの方も多いかと思いますが、元は白川の窯焼きで、のちに
薬販売を手がけた中島氏が、昭和 4 年から 10 年に執筆したものです。内容は多岐に渡っており、まさに肥前陶
磁のバイブルとも言えるもので、以前、資料の少なかつた頃には、ずいぶん重宝しました。窯跡についても、こ
の『肥前陶磁史考』に記載されたものが、現在の包蔵地の登録の元となっており、窯跡の名称もおおむねこの著
作に沿って付けられています。もちろん、実際の綿密な窯跡の踏査によるもので、ちなみに、同じ頃に各地の陶
片採集に熱中された方々としては、武雄市の金原京一（陶片）氏や昭和 3 年から 5 年ほど有田に在住された水町
和三郎氏などもいます。両者はその成果として、昭和 5 年に『肥前古窯址めぐり』を発売されており、ほかにも
水町氏は陶器・磁器の両刀使い、金原氏は陶器の分野で数々の研究成果を発表されています。

話しを『肥前陶磁史考』に戻しますが、何しろやきものについて見聞きしたことは何でも載ってそうなものなの
で、明治 4 年生まれの中島氏の生前中の内容については、本当に重宝します。ただ、惜しむらくは、参考・引用
文献が示されていないので、近世以前の内容については、取扱い注意です。よく、『肥前陶磁史考』に載って
るからなどと言われる方がいますが、近代と近世以前の内容は、ちゃんと切り分けて使う必要があります。特に、
こうして磁器や陶器の研究史を調べてみるとよく分かるのですが、古くから伝わる伝承ではなく、明治以降の研
究の中で生成されたような内容が大半です。

でも、それを踏まえて使う分には、本当に便利な書籍です。（村）R1. 10. 4

有田の陶磁史（105）

前回は、昭和 11 年（1936）刊行の中島浩氣著『肥前陶磁史考』のご紹介に終始してしまいました。本日は、
その中身です。

まずは、当然ながら、この書籍でも、例の祥瑞説については触れられています。元のオリジナルっぽい祥瑞説に
ついては、明治 16 年（1883）の田内米三郎『陶器考』から引き、「上記するところ一顧の値をも発見せず、」
と切り捨てます。

そして、実名こそ上げていませんが、北島似水さんの祥瑞武雄武内磁器創始説については、「此武内磁器の製作
を以て、彼の祥瑞が発祥の地といふに至りては、餘りに無稽極まる妄説なるが故に」と…。そうでしょ、妄説、
妄想がピッタリですよね。

続いて、ちょうど執筆の頃に出された石割松太郎さんのできたてホヤホヤの元和二年祥瑞有田磁器創始説につい
ても、「彼（祥瑞）は僅に十八才位にて遣唐使へも従はず、国禁を犯して渡航せしさへ意外なるに、然も文禄は
明の萬曆にて我秀吉が韓土に於いて交戦中である。此敵国の人民が同国人さへ入鎮を忽（ゆる）かせにせざる官
窯地に、如何にして見学を詳になし得可きや」など、徹底的に叩いています。それにしても、北島さんに、石割
さんですか…。この妄想コンビに目を付けるなんて、やっぱいいとこ突いてますね～。

そして中島祥瑞説としては、

「要するに祥瑞の銘のある支那の青花白磁を、始めて我邦の五郎大夫なる者が入手して愛玩措（お：欲しい気持
ちを抑える）く能はず、再び彼地へ注文せし時に自己の名前を加へて記銘せしめたるにはあらざるか。」「又
或説の如く其後小堀遠州等茶人の好みにて、屢（しばしば）彼地より渡来せしとの觀察は頗る傾聴に値する。」

としており、五郎太夫の存在自体を否定してませんが、例の陶工ではなかった説の変形バージョンにして、陶工
どころか祥瑞銘のやきもの好きの五郎太夫さんみたいな設定にしています。そして、後のものは小堀遠州とか茶
人が中国に注文したとする、祥瑞全部中国磁器説を唱えられています。

もちろん、地元説バリバリ急先鋒の中島氏のことですから、祥瑞を肯定するはずもありませんが、この際、徹底
的に潰しておこうとのことようです。

ということで、今日こそ、朝鮮陶工説を書こうと思ったんですが、また祥瑞に引っかかってしまいました。さすがに、もうこれからは祥瑞は出てきません…、と思います。（村）R1. 10. 11

有田の陶磁史（106）

今回は、昭和 11 年（1936）刊行の中島浩氣著『肥前陶磁史考』の中から、また、祥瑞説に引っかかっていました。今日こそ、朝鮮陶工磁器創始説です。

前に朝鮮陶工説を大きく根づかせるきっかけとなった、大正 6 年（1917）の「陶祖李参平之碑」についてお話ししました。実は、この碑の建立構想には中島氏も深く関わっており、その経緯について、以下のように記されています。

「大正六年十二月我邦陶磁の始祖たる李参平の記念碑落成した之より先き徳見知敬は或衝動を受けて、陶祖建碑の實行甚だ急なるを感じ、一日中島浩氣を誘ひ、二人は報恩寺裏に其墓碑を発見して大いに喜び、之より深川六助と計り、大正六年には陶祖李参平の三百年祭（死去の年より二百七十六年となるも当時不明なりし）（1916年-276年=1640年死去となりますが、どこから引っ張ってきたんでしょうか？謎です。本当は、明暦元年（1655）です。）を挙行すると共に、是非該碑を竣工せしむべく協議した。」

というように、碑の建立を画策した一人なのです。ということは、磁器創始に関する中島説も、当然この碑文の内容と同じはずだとは思いませんか？ところが、大正 6 年当時は分かりませんが、不思議なことに、これが昭和 11 年時点の見解はちょっと違うのです。

碑文の内容は、簡潔に示せば、李参平が元和年間に有田の乱橋に移住して製陶し、その後泉山で陶石を発見して白川に移住し、そこで日本初の磁器を創始したというものです。つまり、後のテッパン説と比べて、磁器の創始年代と天狗谷窯に触れてないことが違うだけです。という点を念頭に置いて、中島説の話をします。

「鍋島宗藩より、陶土の探究の願を許されし三兵衛は、其頃下松浦有田郷なる南川原辺に、韓人の製陶盛んなる由を聞き伝へ、一と先づ此地を目ざして、杵島街道を南下するうち、板野川内といへる処にて、同郷韓人の製陶せる山に差かゝりしが、此地に滞留せしや否やは不明なるも、通路のこととて必ず立寄りしには相違ない。（中略）そして南川原の辺り、乱れ橋（今三代橋といふ）に旅装を解いたのである。」

つまり、多久から有田の三代橋に移ったということですから、ここらあたりはやや詳細に記されているというだけで、碑文の内容と大きな違いはありません。ただ、ここでなぜ板ノ川内が出てきたかと言えば、それはもちろん、当時百間窯磁器創始説があったからです。その元をたぐれば、もちろんあの北島似水さんです。でも、中島説ではとりあえず、寄り道せずに百間窯は軽くスルーして、南川原の乱橋で旅装を解いています。「滞留せしや否やは不明なるも」ってことで、危ういところでしたが、ひっかかりませんでしたね。でも、「通路のこととて必ず立寄りしには相違ない。」とは記してますから、ここら辺がちょっと気にはなるところです。

まあ、それについてはとりあえず置いといて、次は南川原での行動ということになりますが、長くなりますのでまた次回。（村）R1. 10. 18

有田の陶磁史（107）

前回は、昭和 11 年（1936）刊、中島浩氣著『肥前陶磁史考』から、「陶祖李參平之碑」の碑文と比較しながら、李參平による磁器創始説の成立過程を見ているところでした。今回は、多久から、板ノ川内もスルーして、何とか無事南川原の乱橋にたどり着きました。そして、続きです。

ちなみに、碑文の方では、乱橋で焼きものを焼いたことになっています。

「三兵衛が乱れ橋にて開窯せしことは、金ヶ江古文書にも「乱橋と申処へ暫被置居付右在所野開仕日用相弁候但右唐人罷在候処高麗金江と申処の産に御座候由」とある。之に依れば南川原方面にも亦、既に三兵衛と同郷韓人が住ひ居りしものゝ如く、思ふに板野川内韓人の内より此処に移転し来りし者であらう。」

と、わざわざ『金ヶ江家文書』を引用されてます。この文書の内容から、さしあたっては農業で生計を立てたことが分かりますが、陶土を探すために領内を移動していたわけですから、半農半陶ってことでしょうね。ただ、この文書から、どうして既に三兵衛と同郷の韓人が住んでたことや、ましてやそれが板ノ川内から移住した人々であることが分かるんでしょう？まあ、そこらへんは、現在では、三兵衛移住以前から窯業がはじまっていたことは判明していますので、突っ込みはやめとくことにしましょう。先に進めます。

「斯くて三兵衛は乱れ橋なる清六の辻一の窯にて開窯した。それは三尺五六寸巾の小さき登窯を築きしものにて、後年まで今の鉄道線路下がりの勾配に六七間ばかり残存してゐた。」

どこから、清六の辻一の窯なんて出てきたんでしょうね？って言うか、これまでの研究史の過程の中で、清六の辻で三兵衛が窯を開いたなんて書かれたものって、アレしかありません。そう北島似水さんのやつ。何だかがぜん『肥前陶磁史考』もアヤしくなってきましたね。

この“清六の辻一の窯”というのは、現在は“清六の辻 1 号窯”と呼んでいる窯跡です。窯幅が 3 尺 5・6 寸と なっていますが、約 1m くらいってことですから、さすがにそれはありません。当時の窯としてはちょっと大きめの約 3m ってとこですね。“六七間ばかり”残っていたそうですが、鉄道による丘陵の掘削幅は当時と変わっていないと思いますが、発掘調査したところ、窯尻から 3 室しか残っていませんでした。

まださわりの部分ですが、やはりこの『肥前陶磁史考』も、よく読み込まないとアブなような気がしてきましたね。（村）R1. 10. 25

有田の陶磁史（108）

前回は、昭和 11 年（1936）刊、中島浩氣著『肥前陶磁史考』から、「陶祖李參平之碑」の碑文と比較しながら、李參平による磁器創始説の成立過程を見ているところでした。今回は、清六の辻で窯を開いたところでした。

「此処は先住韓人の製陶せる小溝と南川原の間に介在せる所なるが、此辺にては良き原料を得ざりしか、又燃料の乏しかりしに依るか、或は何かの理由により三兵衛の意に満たざるものありしが如く、幾許もなく彼が立ち去

りし跡を、他の韓人来って又此辺に築窯し、或は擂鉢の如き粗物まで焼きしものであらう。蓋し三兵衛の築窯が頗る小形なりしより推考して、彼が仮住的試作なりしことは申すまでもない。」

「陶祖李参平之碑」の碑文には、乱橋に来て陶業に従事したということしか見えませんが、『肥前陶磁史考』では、もっと詳細に記されています。どうやら、三兵衛は短期間で乱橋を立ち去ったようですね。こちらあたりの展開は、北島似水さん説と同じです。北島説では、三兵衛が去った理由の一つを薪や水が欠乏したからとしていますが、これは中島説も似たようなもんです。加えて、「或は何かの理由により三兵衛の意に満たざるものありしが如く」としてはいますが、さすがに北島説のように南川原はすでに別系統の朝鮮陶工達であふれており、その抵抗に耐えられなかったとは書けなかったんでしょうね。

北島説では、三兵衛はこの後板ノ川内に移住して泉山を発見して、百間窯で磁器を創始しました。「陶祖李参平之碑」の碑文だと、乱橋を拠点に探したように読めるんですけどね。ただ、碑の建立にも関わった中島氏のことですから、きっと、北島説のような展開にはならないはずですよ。

「清六を去りし三兵衛は、元来し道より板野川内に移転せしものと推定される、それは其処の韓人が、三兵衛と同郷人のみの集団なりしことが有力なる理拠である。」

あれっ？意外にも、板ノ川内に行っちゃいましたね～？いいんでしょうか？？

「吾人の推測にては、三兵衛は板野川内に落つきて、其界限を探見中、今両郡の堺なる堺松の近傍に於いて、偶然此の一大磁礫にぶつかりしと見るの外ない。（中略）彼は之を板野川内に持ち帰り試焼せしところ、質分甚硬度なることを発見せしより、茲に始めて天然の単味磁石なることを識り、是より種々製作研究の結果は、やがて硬質なる磁器製作の完成となったのである。」

試作に成功したってことなんでしょうが、でも、板ノ川内で成功しちゃいましたね～。これって、泉山発見後、最初に磁器を創始したのが百間窯ってことですよ。北島説みたいになってきましたね。きっと、あの中島浩氣氏が、あの『肥前陶磁史考』が、よもや百間窯磁器創始説だったってことに気付いてる方なんて、ほとんどいないんじゃないでしょうか？さあ、これからどうなることやら…。(村) R1. 11. 1

有田の陶磁史 (109)

前回は、昭和 11 年 (1936) 刊、中島浩氣著『肥前陶磁史考』から、「陶祖李参平之碑」の碑文と比較しながら…、っていうよりも、北島似水説の方がメインでしたが、乱橋後、泉山発見、磁器創始ってところまでの話でした。

てっきり碑文と同じように、乱橋を拠点に泉山を探して発見したんだと思ってました。ところが、おっとどっこい、白川を通り過ぎて、武雄市の板ノ川内まで行ってしまっ、そこで泉山まで発見してしまい、何と磁器の焼成にまで成功してしまいました。これって、もろ北島似水説じゃないですか。まさか、あの『肥前陶磁史考』ともあろうもんが、いくら試作とは言え、最初に板ノ川内で磁器を完成したというんですから、メチャクチャ意外？きっと、『肥前陶磁史考』が、百間窯磁器創始説って知ってる人すらあまりいないと思います。そんならい、衝撃的です。

今さらあれこれ言ってもしょうがないので、とりあえず、次に行きます。

「斯くて三兵衛は、此磁石発見の儀を多久安順に上申し、其許可を得て有田山中なる、上白川溪谷の天狗谷に本拠を構へ、弥々磁器焼造に着手することに定め、旧地多久にありし工人二拾余名を呼寄せせる事となった。」

やっと、白川の天狗谷に移り住んで、磁器を焼いてくれることになりましたか。ほっとしました。でも、この時、多久の工人を 20 余名呼び寄せることになったって話しはどこからきたんでしょうか？もしかしたら、これに続く「宗藩への書立」と題した次の一文でしょうか。

「皿山金ヶ江三兵衛高麗より罷越候書立

一 某高麗より罷渡数年長門守様へ被召仕今年三十八年の間丙辰の年より有田皿山之郷に罷移申候 多久より同前に罷移候者十八人彼者共と其子に而御座候 皆々車抱申罷在候 野田十右工門殿内之唐人子供（唐人子とは韓人なりし自分の製陶弟子といふ意味なるべし）八人 木下雅楽頭殿内唐人子供二人 東の原清元内之唐人子三人 多久本皿屋之者三人 右同前に車抱罷在候

一 某買切（前貸金にて年雇切の者か或は幼年より育て上げし年期者か）之者 高木権兵衛殿内之唐人子四人 千布平右工門殿内之唐人子三人 有田百姓の子兄弟在 伊萬里町助作合十人 所々より集り申罷居候者百二十人 皆々某万事之心遣仕申上候

巳四月二十日 有田皿山

三兵衛尉 印 」

知る限り、多久から人を呼び寄せたことが記録される文書はこれだけです。あちこちに何人なんて出てくるので、もしかしたらこれを足して 20 余名になったのかも？でも、多久から移り住んだのは 18 人って書いてあって、その後の人数が 8 人+2 人+3 人+3 人=16 人になりますので、これに 18 人を足すと 34 人になりますので、さすがにこれはダメそうですね。18 人に三兵衛が直接雇っていた某買切之者だと、10 名のうち有田百姓の子と伊萬里助作は多久からではなさそうなので、18 人+8 人=26 人となり、なかなか良さそうです。この 8 人の中にももしかしたら多久からじゃない人がいるかもってことで 20 余名にしたのかもしれないね。でも、多久から移住した 18 名にも、直接雇用している人がいるとは考えなかったんですかね？謎です。

それはともかく、これってどうして、白川に移り住んでから呼び寄せたことになるんでしょうか？素直に読めば、有田移住の際に、いっしょに移り住んだ人達ってことになりませんか？やはり乱橋は数には入ってないんでしょうか？でも、清六の辻で窯を造って焼いたんでしたよね。『肥前陶磁史考』も、よくよく読むと、けっこう矛盾してます。（村）R1. 11. 8

有田の陶磁史（110）

今回も『肥前陶磁史考』の続きです。前回、その中から「宗藩への書立」という項目にそのまま引用されている、金ヶ江三兵衛の文書をご紹介しているところでした。

この文書は、『肥前陶磁史考』では「宗藩への書立」となっていますが、実は初代三兵衛本人が、鍋島本藩ではなく多久家に提出した文書の写しです。また、三兵衛関係のほかの文書はすべて江戸後期のものなので、これが

唯一生前の文書ということになります。この文書はかすかな記憶では、以前にも引用したことがあるようにも思うのですが、後のテッパン説の形成においてもメチャクチャ重要な役割を果たしており、今回は中島説が白川移住後に多久から20余人が移住したと記すところに軽く触れた程度でしたので、もう一度引用して、じっくり検討することにします。ただし、『肥前陶磁史考』の引用は、ちょっと写し間違っている部分もありますので、ここでは『有田町史 陶業編Ⅰ』から引用してみたいと思います。

皿山金ヶ江三兵衛高麗^ノ罷越候書立

覚

一、某事、高麗^ノ罷渡、数年長門守様江被召仕、今年三十八年之間、丙辰之年^ノ有田皿山之様二罷移申候。多久^ノ同前二罷移候者十八人、彼者共も〔ト〕某子二而御座候。皆^ト車拘申罷有候。野田十右衛門殿内之唐人子供八人、木下雅楽助殿内かくせい子供二人、東ノ原清元内之唐人子三人、多久本皿屋之者三人、右同前二車拘罷有候。

一、某買切之者、高木権兵衛殿移〔衍?〕内之唐人子四人、千布平右衛門殿内之唐人子三人、有田百姓之子兄弟二人、伊万里町助作合十人。所^トと^ノ集り申罷居候者百廿人、皆^ト某万事之心遣仕申上候。已上。

巳四月廿日 有田皿屋

三兵衛尉 印

だいたい意味はお分かりかとは思いますが、いや、これをだいたいこんな感じで読んだところが大きなちよんぼに繋がっていますので、ちょっと説明します。

ここで出てくる“某”とは、もちろん金ヶ江三兵衛のことです。まず、三兵衛は、高麗（朝鮮半島）から渡来して、数年多久長門守安順に仕えて、丙辰の年に有田に移住して、今年で38年になるとします。そして、多久から同じように移住した者は18人で、皆口口細工の技術を身に付けている。その内訳は、以下の“彼者共”と自分の子供であるとして、その内訳を記しています。ここで、記されている“彼者共”人の合計が16人ですので、残りの2人が三兵衛の子供ということになります。

また、三兵衛が専属で雇用している者は合計10人で、あちこちから移住してしてきた者も12人おり、全部自分が「万事之心遣い」つまり、世話役をしたといえます。リーダーということです。

ということで、今回はもう少しこの文書について掘り下げてみます。（村）R1. 11. 15

有田の陶磁史（111）

今回は、「皿山金ヶ江三兵衛高麗^ノ罷越候書立」について、『有田町史 陶業編Ⅰ』から引用して、少し解説を加えたところでした。今回はその続きで、文書に登場する年号について、考えてみます。ちなみに、現在では金ヶ江三兵衛の亡くなった年は分かっていますが、ひとまず、それは考えないことにします。

まず、この文書は、「巳四月廿日」付けで提出されています。この年号については、干支は60年周期ですが、十干の部分が記されていませんので、12年ごとに可能性があることになります。三兵衛の時代に関係ありそうな江戸前期で探すと、

慶長10年（1605：乙巳）、元和3年（1617：丁巳）、寛永6年（1629：己巳）、寛永18年（1641：辛巳）、承応2年（1653：癸巳）、寛文5年（1665：乙巳）、延宝5年（1677：丁巳）、元禄2年（1689：己巳）

あたりが候補となります。文禄・慶長の役の際に渡来してきますので、さすがに元禄2年では長生きし過ぎでしょうが…。

ここで、ヒントとなるのが、文書中にある「今年三十八年之間、丙辰之年と有田皿山之様二罷移申候。」の記述です。前回、38年前の丙辰の年に有田に移住したと説明しました。こちらの方は、60年周期ですので、それほど候補がありません。とりあえず、記してみると、元和2年(1616)、延宝4年(1676)くらいでしょうか。これより前だと、まだ日本に来てませんし、後ろだとさらにその38年後に書かれた文書ということですから、生きてれば化け物です。まあ、延宝4年でも1714年ということですから、さすがにムリでしょうが。そうすると、候補としては元和2年しか残らないことになります。よって、この元和2年、つまり1616年から38年後ってことになりますので、1654年になりますが、その年は承応3年の甲午ですから該当しません。でも、ちょっと待ってください。38年前も、文書の日付である4月20日にピッタリ有田に移住したわけでもないでしょうから、38年に多少足りなくても、多少余っても、38年くらいなら、誤差の範囲でしょうね。すると、前年の承応2年が“癸巳”年です。

この解釈は、実は、ずっと前に紹介した久米邦武『有田皿山創業調子』に見えるので、すでに明治の前期には、知られていたことが分かります。ただ、何度も記していると思いますが、これはあくまでも、三兵衛が有田に移住した年であり、テッパン説のように、磁器が創始されたという年ではありません。

ズバリ元和2年と記すわけではないものの、元和2年という年号を推測させる文献は、ほかにはありません。よって、どうやら何かこの文献の解釈か何かで、磁器創始の年代が元和2年にされた可能性は高そうです。(村) R1. 11. 22

有田の陶磁史 (112)

前回は、「皿山金ヶ江三兵衛高麗と罷越候書立」について掘り下げているところでした。本日もその続きです。

前回で、元和2年磁器創始説は、何かこの文献の解釈か何か関わってそうってところで終わってました。押さえておきたいのは、直接磁器の創始年を記した古文書類はなく、しかも、磁器創始関連以外でも、元和2年の年号を直接記す文献もないこと。つまり、やはり、唯一、この年号を連想させそうなのが、問題の書立に限られるということです。

まだ、お忘れではないと思いますが、そもそも、この文献の精査は、『肥前陶磁史考』に引用されていることから始まったわけです。そこで、中島浩氣氏のこの文献の解釈を覗いてみることにします。

「此書立に依れば、今年三十八年之間丙辰の年より云々とあるは、彼三兵衛が三十八才の時にて、丙辰は則ち元和二年である。而して此書立を差出せしは巳とある故に、翌三年の四月二十日に当ってゐる。此前後の消息より考察して、我邦白磁を創製されし泉山磁礦の発見は元和二年に相違ない。」

ついに、でたー！！って感じですが…。まあ、内容自体はさほど難しいわけではありませぬのでお分かりいただけると思います。ただ、「此前後の消息より考察して」と書かれているように、この前後の消息を深読みしないと、なぜ「元和二年に相違ない。」のかが見えてきません。

まず、念頭に置く必要があるのは、この元となる書立には、「所と集り申罷居候者百廿人、」とありますので、方々から120人もの方が集まってきてから書いている文献だということが分かります。この120人はおそらく三兵衛や多久から移り住んだ人たちと同じ窯焼きの人数で、多久から三兵衛とともに移り住んだのが18人、三兵衛自身10人の人を雇っていると記しているのです。120人+19人で、だいたい140人くらい。仮に1人が三兵衛

と同様に10人雇用していたとすると、140人×10人で1,400人。この1,400人にも家族がいたでしょうから、おそらく有田に移り住んだ総勢は、数千人になるのではないのでしょうか。

という前提のもとに考えてみると、有田に数千人規模の人が集まるシチュエーションなんて、どう考えても磁器創始しかありません。何しろ、以前ご紹介したように、当初の有田は場末も場末、零細、弱小の、いつ潰れるかも分からないような窯業地だったわけですから。

ということは、中島説では、書立を提出したのが元和3年ですから、磁器創始はそれ以前ということになります。
(村) R1. 11. 29

有田の陶磁史 (113)

前回は、昭和11年の中島浩氣著『肥前陶磁史考』の中に、ようやく元和2年磁器創始説を発見したところでした。そして、「此前後の消息より考察して」、「元和二年に相違ない。」としているので、その前後の消息について、深読みしている最中でした。まずは、「皿山金ヶ江三兵衛高麗と罷越候書立」の内容を見ると、どう考えてももう磁器創始後に書かれたものだという話しをしました。

そうすると、書立の中に見える、三兵衛の生存中に合致する“丙辰”の年は、60年周期ですので、当然、元和2年しかありません。もちろん、この年は三兵衛が有田に移住したとする年です。

ここからが問題です。何と中島氏は、この書立に記される「今年三十八年の間」を今から38年前に有田に移住と読まずに、三兵衛が38歳の時と解釈してしまいました。そうすると、中島説が取り得る書立の提出された“巳”年は、前回見たように、三兵衛の生前である可能性のある元和3年(1617:丁巳)、寛永6年(1629:己巳)、寛永18年(1641:辛巳)、承応2年(1653:癸巳)あたりが候補になってくるわけです。ただ、38年前ではなく、38歳にしてしまいましたので、これ以上絞る材料がありません。

ここで思い出してください。中島説では、三兵衛は有田の乱橋に移住して、「彼が仮住的試作なりしことは申すまでもない。」と記すように、ごく短期間清六の辻で製陶した後、板ノ川内に移り住んで、泉山を発見したんです。そうすると、有田移住が元和2年ですから、短期間製陶したはずなのに、寛永6年だとしても、泉山発見まで13年もかかっていることになります。それでは、ちょっとかかり過ぎだと思われるので、もう書立を提出した候補としては、元和3年しか残らないことになります。

ただ、ここからがちょっとせわしいのですが、見てきたように、書立提出の頃には、三兵衛は板ノ川内からすでに白川に移りすんで、有田に人々がたくさん集まってきた後でしたので、すでに磁器が創始された後ということになります。ところが、書立の日付は4月20日付けですので、もう元和2年のうちにでも、泉山を発見したと考えると、ちょっと窮屈になってしまいます。さらに泉山発見後白川に天狗谷窯を築いて焼いてしまわないと人々が集まってこないわけですから、磁器の創始も元和2年のうちに収めるしかないのです。

中島氏のいう「此前後の消息」というのは、だいたいこんなあたりではないかと思います。やっと、元和2年磁器創始説にたどり着きました。そして、この『肥前陶磁史考』以来、元和2年という年号が当たり前のようにつけられるようになったのです。めでたし、めでたし。

ただし、中島説がそのまま定着したわけではありません。「陶祖李参平之碑」恐るべしです。「朝鮮人陶工李参平は、元和二年に泉山を発見し、白川天狗谷に窯を築いて、日本初の磁器を創始した」というこの後のテッパン説は、板ノ川内に寄り道する中島説ではなく、碑文に泉山や磁器創始の年代を加えた状態で通説化したのです。ただ、もうこれ以外の説は事実上駆逐されてしまい、板ノ川内説を信じる人もいないわけではありませんでした。もう積極的に唱えられることはありませんでした。ただし、通説がテッパン化するのには、もう少し後のことです。
(村) R1. 12. 6

有田の陶磁史 (114)

前回までに、昭和 11 年発行の中島浩氣著『肥前陶磁史考』によってようやく元和 2 年（1616）磁器創始説が提唱され、「元和 2 年に、朝鮮人陶工李參平は、泉山で陶石を発見し、白川天狗谷に窯を築いて、日本初の磁器を創始した」という、以後長らく通説となった説の完成を見たこととお話ししました。本日は、それが後の文献で、どのように記されるようになったのかについて、ちょっと示しておきます。

たとえば、昭和 34 年（1959）発行の『古伊萬里』の中で、水町和三郎氏は、以下のように記されています。

「時たまたま平戸領との境界地乱橋附近に同族が集団して陶業を営んでいることを知った三兵衛は、彼の地ではすでに自分が探している良質原料を見出しているのではないか、更に製陶上学ぶべきものがないであろうかと、領主に乞うて該地方の陶業視察の旅に出た。（これは元和二年一族を率いて有田へ移住する前であって、現存する葎の元、原明、柳の本、牛石、天神森、小物成、小溝山、清六の辻、黒牟田山、向原高麗神等の諸窯を視察したのでであろうと想像する。）然るにこの附近の製品は粗雑陶であって原料的にも技術的にも得るところがなかったのに失望した三兵衛は陶業の視察を打切り、専ら良質原料の探査に努め、惨憺苦心の結果、遂に有田川の上流、現在の有田町泉山に白磁礫を発見するに至った。ここに白磁創業の意を固めた三兵衛は、ひとまず多久領に帰り領主の許しを得て元和二年（一六一六）一族十八人とともに此地に來り、泉山原料地に近い上白川天狗谷の地に窯を築き、磁器の焼造を創めた。これが肥前に於ける磁器の創始であると共に我が国に於ても磁器焼造の嚆矢であった。」

だいたい、通説と似たようなものですが、水町説がちょっと違うのは、乱橋に行ったのは、元和 2 年よりも前としているところですね。なぜ、そうなるのかと言えば、まず一つは、このあたりの窯跡の陶器が、多久の高麗谷窯跡の製品なんかと比べて、質がかなり落ちるので、わざわざそんなところで焼いていたはずがないということ。でも、金ヶ江三兵衛は、最初多久の唐人古場窯跡で焼いて、その後、高麗谷窯跡で焼いたなんて言われてますが、そっちの方がもっと製品差が大きすぎると思うんですけど？

もう一つは、水町氏がこの時に巡ったであろうとする窯の中で、原明や天神森、小物成、小溝、清六ノ辻、黒牟田、迎原天神みたいな有田の窯ではすでに磁器が焼かれています、かつてはこのあたりの磁器は、天狗谷窯跡なんかよりも、もっと新しいと思われていたということがあります。というのは、この現在は最初期だと考えられている南原付近の窯場の磁器は、平均的に、天狗谷窯跡などと比べて器肌はるかに白くて、きれいなためです。

だから、中島浩氣説では、ちょっとだけ乱橋移住後、清六の辻で試焼きしましたが、水町説では製陶させるわけにはいかなかったんでしょね。ただ、乱橋を去った後、板ノ川内に寄らずに、どこを拠点としたか分かりませんが、普通考えたら流れとしては、多久高麗谷から泉山発見、そして白川天狗谷移住ってことでしょうね。（村）R1. 12. 13

有田の陶磁史 (115)

今回は、『肥前陶磁史考』以降の説の例として、昭和 34 年（1959）刊行の『古伊萬里』の中から、水町和三郎氏の磁器創始説についてご紹介しました。前にも書きましたが、これ以上、あれこれ著作をご紹介しても、逆に水町説がちょっと乱橋の解釈で違う程度で、大した違いはありません。そこで、今回は、昭和 47 年（1972）

発行の発掘調査報告書『有田天狗谷古窯』の中から、少しお話ししてみたいと思います。理由はおいおい説明いたしますが、この発掘調査と調査報告書は、通説の Teppan 化には極めて重要です。

その中から、まず最初に、天狗谷窯跡が日本磁器の創始窯となっていく過程について、永竹威氏の「第六 天狗谷古窯址周辺出土資料の考察」の中から拾ってみたいと思います。

「日本磁器の創始窯として有田郷、上白川の天狗谷古窯址が識者の間で注目をあびたのは、昭和五・六年頃からである。それ以前は、鍋島家文書類や多久家旧記や金ヶ江旧記を基調にして久米邦武が有田皿山創業調に上白川古窯にふれ、北島似水が日本陶磁器史論に記した程度であった。大正期に入り大西林五郎の日本陶誌下巻に、泉山白磁鉢を発見した李参平について記してあるが、寺内信一が有田工業学校長に就任し、彼が上白川に居を定め、上白川・中白川・下白川の「白川古窯群」に興味を抱いた頃に小野賢一郎の「陶器大辞典」が編纂され、寺内は上白川天狗谷開窯についての旧記録類を広く収集し大辞典に公表した。このような経緯のなかでようやく磁器創業窯としての天狗谷古窯址の比重が高まったとみるべきであろう。」

もう少し、この続きも引用する予定ですが、とりあえず、その前半部分について、説明を加えておきたいと思います。

これによると、天狗谷窯跡が注目されるようになったのは、昭和5・6年からとあります。実は、大正末から昭和初期の頃には、急に窯跡の発掘が盛んになっています。もちろん、発掘と言っても、現在のような考古学の方法論に基づいたものではなく、要するに陶片採集です。これは、おそらく昭和2年に韓国の忠清南道公州市の鷄龍山で発掘調査が行われ、それが日本でもずいぶん話題になったようなので、それが関係しているかと思います。また、特に唐津焼に関して、あまりに古文書が貧弱であるため、何か新しい研究方法はないかということで、窯跡の資料に目が向けられるようになったということもあります。

現在、唐津市北波多の岸岳に、飯洞甕下窯跡という極めて遺存状態の良好な窯が残っていますが、この窯体が発見されたのが昭和5年のことで、これで一気に窯跡あさりに火が付いています。同様に、以前ご紹介しましたが、大宅経三氏によって、武雄市の武内周辺の窯跡が発掘され、武内磁器創始説が提唱されたのも、昭和5年と6年のことです。

永竹氏の文章では、天狗谷窯跡が注目をあびたとした後、明治・大正期の天狗谷窯や李参平について触れた著書が示されますが、やっぱり、北島似水さんここでも堂々ランクインです。これまでさんざん記してきたとおり妄想だらけなんです、それでも、かつてはかなり影響力があったんでしょうね。

なお、寺内信一氏が天狗谷窯開窯の旧記録類を収集して掲載したと記す陶器大辞典は昭和16年刊行ですから、天狗谷窯が注目されだしたとする昭和5・6年よりも、少し後のことです。ちなみに、この寺内信一氏の子孫にあたる家系は、今でも上白川に居を構えておられ、窯元として続いています。（村）R1. 12. 20

有田の陶磁史 (116)

前回は、昭和47年(1972)発行の発掘調査報告書『有田天狗谷古窯』の、永竹威氏の「第六 天狗谷古窯址周辺出土資料の考察」から、天狗谷窯跡が日本磁器の創始窯となっていく過程について引用している最中でした。本日はその続きです。

「その頃は、旧記録類や古老の言い伝えに基づいた程度で、僅かに寺内信一らが、その古窯址の一部を確認したにすぎない。昭和五年から六年にかけて旧帝室博物館の陶磁室の北原大輔・鷹巣豊治は長期にわたって佐賀県内

に滞在し、金原京一らの協力で、陶器系・磁器系の古窯址の概念的な確認と、陶器片・磁器片の表面採集を行なっているが、その後、地元の金原京一・水町和三郎らが体系的に古窯址の確認と磁片の採集を続けたにすぎない。昭和 32 年に肥前陶磁研究会が古伊万里調査委員会を組織し、工芸学的な角度から磁器窯創始期の伝世品や採集磁器片についての研究を発表したが、まもなく識者や愛陶家の間で天狗谷古窯址をふくめた創業期から安定期の有田郷内の磁器を古伊万里から分離して「初期伊万里」と分類するようになった。」

引用は、「その頃は」からはじまりますが、これは前回の寺内信一氏が、昭和 16 年の『陶器大辞典』に掲載したという頃のことですから、昭和の初期というか前期というか、昭和の早い時期のことを指しています。

そして、旧帝室博物館の二人の名前が挙げられていますが、北原大輔氏の陶片採集と言えば、よく知られているのは、磁器創始の方ではなくて、“古九谷有田説”をはじめて発表されたことの方でしょうね。ただ、この時は、みごとに彩壺会に潰されていますが…。それから、鷹巣豊治氏は、有田出身の方です。

この旧帝室博物館のお二人に協力したという金原京一氏については、以前どこかで触れたように思いますが、もともとは武雄市で古美術商をしていた方で、当時の陶片採集の権威的な存在ですね。水町和三郎氏についても触れたかと思いますが、昭和 3 年から 5 年間程度、有田の某陶磁器メーカーの招きで有田に滞在し、その間に、陶片採集を通じて金原氏と知り合いになり、『肥前古窯址巡り』を執筆されています。

次の昭和 32 年の古伊万里調査研究会が発表したというのが、前々回に水町氏の記述について触れた『古伊万里』のことです。また、この最後あたりの記述から、昭和 30 年代に古伊万里から初期伊万里が分離されたことが分かります。ちなみに、それまでは、有田の民窯製品という位置付けであった古伊万里が、製品のスタイル別分類である古伊万里様式になったのもこの頃です。もちろん、古伊万里だけではなく、古九谷や柿右衛門、鍋島なども同時に様式が付くようになっています。

今年の仕事は今日で終わりです。この磁器の創始者シリーズがはじまったのは昨年 7 月のことですから、結局、有田の陶磁史というタイトルなのに、歴史的には 1 ミリも前に進みませんでした。もうゴールはすぐそこです。来年早々にでも片付けてしまいます。それでは、皆さま、本年はお付き合いいただきましてありがとうございました。来年もよろしくお願いたします。（村）R1. 12. 27

有田の陶磁史（117）

あけまして、おめでとうございます。

令和になってはじめての正月でしたが、いかがお過ごしだったでしょうか。

昔と比べると、ずいぶん正月らしい風情もなくなってきましたが、新鮮な気持ちでまた新たな 1 年を迎えられることが何よりのことかなとも感じています。

とりあえず、このブログも相変わらず小難しいことばかり書いていますが、できる限り分かりやすくすることは心がけたいと思いますので、今年もお付き合いをよろしくお願いたします。

さて、今回は昭和 47 年（1972）発行の発掘調査報告書『有田天狗谷古窯』の、永竹威氏の「第六 天狗谷古窯址周辺出土資料の考察」から、天狗谷窯跡が日本磁器の創始窯となっていく過程について引用したところでした。

ついでに、同書の中から、この発掘調査の頃に磁器の創始はどう考えられていたのかについて、調査団長を務められた三上次男氏の序言の中から拾ってみます。

「有田天狗谷古窯は、窯業をもって古くから世に知られている佐賀県有田町の上白川天狗谷に存在する古窯址群である。古記録の伝えるところによると、朝鮮から渡来した陶工集団の長であった李参平によって江戸初期の元和二年（一六一六）、良質の白磁鉦が有田の泉山で発見されると、それを素地としてすぐれた白磁器が有田の地において生産され、これがその後の肥前窯業の先駆をなしたという。その泉山の陶石をつかって初めて見事な白磁を焼成したのが天狗谷の地であったというのである。」

いかがでしょうか。表現はやや異なりますが、通説そのままです。

この天狗谷窯跡の発掘調査は、昭和 40（1965）年から 45 年の間に 6 次に渡って実施されており、有田の窯跡では、はじめて考古学的な手法で実施された発掘調査です。昭和 41 年が有田焼創業 350 年に当たるため、その記念事業の一つとして実施されたものです。

「元和 2 年に、朝鮮人陶工李参平は、泉山で陶石を発見し、白川天狗谷に窯を築いて、日本初の磁器を創始した」という通説は、実は、この発掘調査を通じて、テッパン説になります

大正 6 年（1917）に陶祖李参平 300 年記念で建立された「陶祖李参平之碑」の碑文で、だいたいの形ができあがった通説は、昭和 11 年（1936）の『肥前陶磁史考』によって、元和 2 年（1616）の泉山発見と天狗谷窯跡における磁器創始が加わって、全部の形が完成しました。その後、昭和 40 年代の天狗谷窯跡の発掘調査によって、押しも押されもしないテッパン説となって、ほぼ昭和時代から平成のはじめくらいまで、半世紀以上も信じられてきたのです。ただ、さすがに現在は、学術系の歴史ではもうこの説は出てきませんが、まだ、観光関係の雑誌やパンフレット類では、バリバリ現役です。

この天狗谷窯跡の発掘調査は、この通説にとって極めて重要なものなのですが、おそらく発掘調査報告書を読んでも、一般の方々には読みこなせない部分が多々あるのではないかと思います。そのため、ぜひここで活字の記録として残しておきたいのですが、実は、現在のサイトになる前の同じ「泉山日録」のサイトで、一度取り上げたことがあります。ただ、もうその旧サイトは見ることができませんので、これから、それを加筆訂正しつつ、再度ご紹介してみようかと思えます。（村）R2. 1. 10

有田の陶磁史（118）

前回までで、ようやく磁器の創始者シリーズも一段落しました。1 年半くらいも延々とやってたわけですから、長かったですね。付き合いせられる方も大変だったかもしれませんが、でも、一度、研究の原点からじっくりと調べておきたかったので、とりあえず最後までたどり着けてホッとしました。こうして活字化しておけば、今すぐ必要ではなくても、いざという時に使い回しができるので便利です。いや、普通の方々がこんな内容を使い回せる機会があるわけもないので、特殊な商売の人には限られますが…。

それにしても、振り返ってみれば、調べれば調べるほど、明治頃までの“祥瑞”の活躍すごかったですね。それに、北島似水さんなんか話が盛るもんだから、中身がでかくなること…。さらに、昭和のはじめになると、石割松太郎さんが起死回生の一発逆転を狙って、さらに大風呂敷広げるもんだから、あえなく自滅してしまいましたけど…。

その後は、もう“李参平”の一人勝ちです。まあ、大正 6（1917）年の「陶祖李参平之碑」建立で、ほとんど決着は着いてたんですけどね。ただ、元和 2（1616）年磁器創始説は、たぶん、活字としては、昭和 11（1936）年の中島浩氣著『肥前陶磁史考』が言い出しっぺですけど。

それによって、「元和 2 年に、朝鮮人陶工李参平は、泉山で陶石を発見し、白川天狗谷に窯を築いて、日本初の磁器を創始した」とって説が、独り歩きをはじめたわけですが、ただ、これは厳密に言えば中島浩氣説とも違いまし

たけどね。何しろ中島説は、意外にも、百間窯磁器創始説ですから。だから、通説は「陶祖李参平之碑」の碑文と中島説の合体みたいなもんです。

ですから、よく今でも、「元和2年に磁器が創始されたと、伝えられている。」なんて書いてあるものを見ますが、真実は、あくまでも、昭和時代から伝えられているってことですのでお間違えなく。

ただ、この説が押しも押されもせぬ Teppan 化したのは、もう少し後のことです。昭和40（1965）年から45年の間に六次に渡って天狗谷窯跡の発掘調査が実施されていますが、これによって科学的なお墨付きを与えられたとして、Teppan 化したわけです。

そう言えば、もう昔、昔の話しになりますが、大学院の入学試験の際に、「日本磁器の発生と発展について記せ」という設問が出たのを、今でも鮮明に覚えています。もちろん、今ならそういうのもアリかもしれませんが、ただ、何せ、まだ近世なんぞがまっとうな考古学だと思われていない時代。陶磁器がアジヤやサバじゃあるまいし、いわゆる“光り物”と呼ばれて、そんなことするやつは完全完璧なる変人扱いされていた時代のことです。別の時代からの転向組はともかく、純粋培養の近世専門の人なんて、たぶん片手の指でも余るほどしかいなかった時代です。ですから、ましてやそんな設問に答えられる学生がいるわけがありません…。と、言いたいところですが、一人だけいました。解答用紙の表だけではならず、裏にまで書いてしまったのです。当時、その学校では、何と有田の山辺田窯跡の整理作業をしていましたので、これは便利なやつが現れたと思われたんでしょうが、見事合格しました。もちろん、入学早々、窯跡の整理作業が回ってきたのは、言うまでもありません。

まあ、当時解答した内容はこの Teppan 説だったわけですけど、その後もその威力はなかなかのもんでしたね。皆、完全に、そういう言い伝えがあるもんだと信じ込んでましたから。でも、奉職以来長年有田にどっぷり漬かってますが、やはりとんとそんな言い伝えには会えることはありませんでした。それでも、押しも引いてもびくともしませんでした。ようやく平成の後半頃には、少しは Teppan も柔らかくはなってきたってところでしょうか。多少の修正は認められるようになりました。偶然かもしれませんが、どうも、有田焼創業300年にはじまって、50年くらいごとに内容が変わるようですね。300年が「陶祖李参平之碑」ですし、Teppan 化のきっかけとなった天狗谷窯跡の発掘調査も350年の記念事業です。2016年の400年の頃には、ようやく磁器創始が現状では元和2年とは確定できない、李参平が創始したのではないかもって言っても、怒られなくなりましたから。

このブログでは、長らく日本磁器創始説について述べてきたわけですが、結局行き着いたのがかの通説なわけですから、最後に、それがなぜ長らく信じられる説となったのかということについても、ちゃんと突き詰めておきたいと思います。昭和のはじめに完成した当時は、まだまだ根拠に乏しい脆弱な説だったわけですが、先に述べたように、それを盤石なものとしたのが天狗谷窯跡の発掘調査というわけです。

実は、天狗谷窯跡調査の経過については、2013年にこの同じ“泉山日録”で一度記したことがあります。しかし、その後2015年の11月に有田町のHP自体が変更になってしまい、歴史民俗資料館のページも一新された関係で、残念ながら、今はもうネット上には残っていません。プリントして残してあるような奇妙な方もいないでしょうから、あらためてもう一度修正を加えながら、記してみることにします。って前回も書いたのですが、今回は、くだらないことをダラダラ書いてたら、そこまでたどり着きませんでした。（村）R2.1.17

有田の陶磁史（119）

今回からは、本当に、天狗谷窯跡の発掘調査の話しをします。もちろん、この発掘調査当時は、まだ右も左も分からないようなご幼少のみぎり…、いや、はなたれ小僧の時代ですので、直接当時の様子は知りません。ただ、その発掘調査報告書が実によくできていて、本当に読みこなせば、当時の状況が仔細に分かります。ということで、ここからの元ネタは、発掘調査報告書と、実は、この発掘の調査団長や調査主任も大学や大学院時代の恩師ですし、当時学生として参加していたのも学校の先輩方ですので、よく話しは聞いていました。

有田で行われた窯跡の発掘調査は、昭和 33（1958）年の稗古場窯跡が最初です。ただ、これは実際に窯体は掘り当ててますが、考古学的方法論に基づくものではなく、いわばお宝探しです。その後、しばらくは発掘調査が行われることもありませんでした。

ところが昭和 40（1965）年に、偶然にしてはできすぎのようないくつかの要因が重なり、窯跡が発掘調査されることになったのです。もちろん、天狗谷窯跡のことです。ちなみに、これが有田の発掘で、はじめて考古学的手法が導入された調査です。また、これ以後は、折に触れ発掘調査が行われるようになっていきます。さらに、合併前の旧有田町の文化財関係の諮問機関が設立される発端ともなったという意味では、有田の文化財保護行政の起点とも言える発掘調査でもありました。

この発掘調査のはじまる 1965 年と言えば、翌年が 1616 年から数えて有田焼創業 350 周年に当たる年で、その記念事業の一つとして実施されたものです。ただ、当初から 350 年事業として、じっくり暖められてきたものではありませんでした。偶然に偶然が重なったのです。

天狗谷窯跡では、1965 年から 70 年に渡り、6 回の発掘調査が実施されています。正確には、一次調査の直前に予備調査が行われており、合計 7 回発掘されたこととなります。もっとも、最初から何度も調査を行う予定ではありませんでした。予想外のことが重なり、段々回数が増えていったのです。

事の発端は、今でもなくなりませんが、“盗掘”の盛行です。当時、趣味や研究目的の窯跡の陶片採集が盛んに行われはじめており、天狗谷窯跡でも物原部分に散乱する陶片の収集が行われていたと言います。ただし、その頃の関心はもっぱら陶片に終始しており、窯本体などについての意識は希薄でした。ただし、窯業従事者の多い土地柄ですので、一部の地元の方々の間では、徐々に窯体への関心も持たれはじめていたようです。

当時、窯跡の位置する丘陵の上方に、一部窯壁の露出している部分が知られ、そこが窯体の位置を特定できる唯一の情報源として認識されていたようです。ところが、ある日、陶片収集の乱掘によってその部分が破壊され、客観的に窯体の存在を示すものがなくなってしまったのです。（村）R2. 1. 24

有田の陶磁史（120）

前回は、盗掘によって、天狗谷窯跡の窯体が唯一露出していた部分が破壊されたってとこで終わってました。続きです。

この盗掘の後の状況については、発掘調査報告書の久保英雄（蕉破）氏の記述の中で、次のように記されています。ちなみに、この久保蕉破氏は陶芸作家で、現在もご子孫により“大日窯”という窯元として続いており、蕉破氏時代の初期伊万里風の兎の絵柄や、古伊万里風の絵柄の猪口や小皿などは今でも作り続けられています。

「昭和三十八年中部日本新聞社刊行、「カメラ芸術」の企画により、「伊万里」と題する製陶地シリーズの撮影取材のために来有の土門拳氏一行を迎えるにあたり、天狗谷古窯址を案内したさい、遺されていた天狗谷窯址の唯一の窯壁はすでに破壊されており今後の調査の手掛りを無くしてしまった。このことはその後も続いていた陶片収集のための濫掘であることを確認した。」

そのため、久保氏はこれ以上の破壊を防ぐため、肥前陶芸作家協会の代表者の方々などとともに、天狗谷窯跡の保護・保存の嘆願書を有田町長と町議会議長宛に提出されたのです。これを受け、町と町議会は天狗谷窯跡を史跡として指定することを内定した旨回答したと言います。

現在、有田町には教育委員会に文化財関係の諮問機関として、文化財保護審議会が設置されています。旧有田町においては、そのはじまりは天狗谷窯跡の町史跡指定を目的として、この時組織されたものだったのです。当時

は、文化財保護委員会の名称ですが、この委員会において指定するよう答申が出され、有田町教育委員会が町の第1号の史跡として指定しています。

指定台帳によれば、指定日は昭和40年3月10日付けとなっています。名称は「有田天狗谷古窯跡」で、形状及び特徴の項目には、次のように記されています。

「同所は山林で標高100m前後の所にあつて、左方凹地に窯壁が二つ認められるが、一帯（右方向）に多数の磁器片や窯道具等が散乱し、古窯跡であることが認められる。李朝風の初期の破片が多く、陶祖李参平開窯と伝えられている古窯にふさわしい物原である。古窯室は表土上に認められない。」

また、指定事由は、以下のとおり示されています。

「陶祖李参平ゆかりの古窯跡地として、物原に多数の初期磁器片が散乱し、白磁発祥時における焼成苦心の跡が認められ、価値高い物原を保存するため指定した。将来発掘調査により古窯室が出現することを期し、山林中の物原一帯を指定した」

とあります。つまり、当時は将来の窯体の発見を期しつつも、李参平ゆかりの窯跡として、主に物原の重要性を重視して史跡として指定したようです。

こうしたタイミングで、一つの事件が起こりました。天狗谷窯跡の域内に製陶工場が新設されることになり、その鍬入れ式が行われました。その時、偶然、窯体の焼成室の一部が発見されたのです。（村）R2.1.31



史跡整備前の天狗谷窯跡（平成12年10月30日撮影）

左側に二列並んで段状に登るのが窯体の埋まる部分、右側のこんもりと盛り上がった部分が物原である。物原部分には、白い磁器片が散乱している。

有田の陶磁史 (121)

前回は、天狗谷窯跡を町の史跡第1号として指定したところまででした。続きです。

昭和40(1965)年3月10日付けの史跡指定に続いて、町の文化財保護委員会では、場所の特定できている物原の発掘調査を計画することにしました。ところが、それを計画中の5月に窯跡の域内に製陶工場が新設されることになり、その鍬入れ式が行われました。その時、偶然、窯体の焼成室の一部が発見されたのです。

そのため、急きょ、有田町教育委員会と文化財保護委員会により現地の検分を行い、文化財保護委員会は発掘調査の実施を決議し、町あてに進言しました。この時の状況については、発掘調査報告書の青木類次町長の序文に次のようになります。

「物原出土品等によって李參平ゆかりの地として史跡に指定されていた天狗谷のゆるい傾斜ののぼり口から、土地所有者の藤本氏によって古窯壁の一部が掘り出されていた。このように李參平に関する貴重な資料が明らかにされたのを契機として、町教育委員会、町文化財保護委員会から、早急に、専門家による徹底的な発掘調査を実施するよう強い要請があった。わたくしは、その重要性を認め、三百五十年祭記念事業の一環として、発掘調査事業に踏み出すことにした。」

これにより東京大学教授(当時)三上次男氏を調査団長、駒澤大学非常勤講師(当時)倉田芳郎氏を調査主任とする調査団が組織されたのです。ちなみに、三上氏は、一連の天狗谷窯跡調査中の昭和42(1967)年に青山学院大学に移られ、同大学の史学科の設立ならびに考古学研究室の開設に尽力されました。また、倉田氏も、昭和40(1965)年に東京大学助手から駒澤大学に移られ考古学研究会を発足させた後、翌々年に同大学専任講師となり歴史学科に考古学専攻が誕生しました。そして、天狗谷窯跡発掘継続中の第5次調査が行われた翌昭和43年には助教授となられています。

ちなみに、この発掘調査で実働部隊となったのは、主に駒澤大学考古学研究会や青山学院大学の考古学研究室の学生、それから当時泉山で陶石を掘っていた作業員の方々です。さすがに、磁石場の作業員さんたちは、屈強だったそうですよ。たとえば、天狗谷窯跡の窯体には、横の丘陵から大きな岩が崩れ落ちていたんですが、石の目に合わせて、簡単に砕いていたと、倉田氏からお聞きしたことがあります。まあ、かつての考古学と言えば、完全完璧なる体育会系で、考える前に体で覚えるが基本でしたので、学生さん達も大概ムチャはしたでしょうけど？

さて、こうして発掘調査体制は整いましたが、これからどうなっていくと思いますか？結構、いろんなハプニングや驚きがあっておもしろいですよ。(村) R2. 2. 7



発掘調査時の天狗谷窯跡（発掘調査報告書より）

写真右下にある建設中の建物が、鍬入れ式の際に窯体が発見された製陶工場

有田の陶磁史（122）

前回は、いよいよ三百五十年祭記念事業の一環として、天狗谷窯跡の発掘調査の体制が整えられたところでした。

一次調査は昭和 40（1965）年の 10 月 29 日～11 月 11 日の 14 日間の日程で行われましたが、何とそれに先立ち 10 月 12・13 日には文化財保護委員会の手により、予備調査が実施されたようです。もちろん、考古学的な発掘調査など経験のない方々ばかりです。しかも独自の判断で行われたらしく、久保英雄氏は「このことは三上氏調査来有の折、痛く注意指示を得ることになったのである。」と記されています。まあ、そりゃ、そうでしょう。いざ、これから調査するって時に、予備調査と言えれば聞こえがいいものの、方法も分からないまま掘っちゃったんですから。小言の一つも言いたくなくて当然です。

結局、この一次調査では、鍬入れ式の際に発見された A 窯とそれに隣接する B 窯の 2 窯が発見され、それから、丘陵の上方で一部露出していた未知の窯（後に D 窯と命名）の存在が確認されています。倉田氏はこの発掘に際しての予想を、次のように述べられています。

「天狗谷窯址を調査するにあたっては、当初調査団内で窯址の規模・構造についての予測があった。窯址周辺から大量の白磁片が採集でき、その白磁片の状態から、本邦での白磁焼成初期の窯であることは決定的であるので、それほど大規模ではないはずだ、と考えられたのである。」

つまり、当初は 1 基の小規模な窯体を想定していたため、調査が何次にも渡るとは考えられていなかったということです。今日のように、発掘調査の実績が積み上がってくると、当初から大規模な窯で焼成されたこと、また、窯体規模は窯の時期とは直接関係ないことは分かっていますが、当時はまだ近世どころか中世ですら、考古学の対象だとは捉えられていなかった時代です。調査例もほとんどなく、まさに掘ってみないと何が出てくるのか分からないという、完全に手探り状態の時代だったはずですよ。

そりゃ、そうですね。昭和の終盤から自分で有田の窯跡の調査を手がけるようになった頃ですら、せいぜい10数か所の調査例がある程度で、ほとんど17世紀の窯跡ばかりでしたし。だから、その頃ですら手探り状態でしたから。何しろ磁器創始期の窯って考えてたわけですから、最初は試し焼用みたいな小さな窯で焼いたと考えても何ら不思議ではありません。ただ、実際には、肥前の近世窯業の窯には、唐津焼と称された陶器の窯も含めて、当初の試し焼みたいな窯ってないんですけどね。ただ、それは今だから言えることです。（村）R2. 2. 14



第一次発掘調査風景（A窯）

有田の陶磁史（123）

一週間ほど有田の地を離れてましたので、この連載も1回お休みをいただきました。大変失礼いたしました。昨今、世間では新型コロナウイルスの話題で持ちきりですが、もちろん、隔離されていたわけじゃありません。たっぷりのマスクとアルコール消毒液を荷物に忍ばせて、しばしドイツのドレスデンというところにあるツヴィンガー宮殿に遠征してました。もちろん、有田のポーセリンパークにあるやつじゃなくて、本物の方。

福岡空港から羽田空港へと飛び、普段しなれないマスクの苦しさにも悶絶しながら、一路ドイツへ。福岡といい、羽田といい、マスクしてないとにらまれそうな雰囲気。窒息しそうだけど、ここはじっとガマンです。いくら心頭滅却しようが涅槃の境地に至ろうが、今イチしっくりこないエコノミークラスの座席と格闘しつつも、ようやくフランクフルト空港に到着。何かしら違和感を感じるものの、ひたすら目的地を目指すド田舎のオヤジに、周囲に目配りする余力などあるはずもなし。そして、ドレスデン空港へとひとつ飛び、目的地に到着して、ようやく周りを見渡す余裕もポチポチ。“あれっ？” 予定ではウジャウジャいるはずの、マスクした人がただの一人もいない。慌ててはずしましたよ。マスク。今どき、日本人だか中国人だか分からないような東洋系のオヤジがマスク…？いくら何でも、逆に怪しさプンプンでしょう。

以下、トップシークレットのため（そんな、わけない）、現地でのミッションは省略。

福岡空港から有田への帰りは、国際線ターミナルから出る高速バスを利用しました。バスの待ち時間の際のこと。ふと前を見上げると、ちょうど空港内の到着便が次々に表示される掲示板に、目が釘付けになったのです。“北京” “上海” “香港” “仁川” “釜山”…。思わず、何のためらいもなく、マスクしてしまいました。

というわけで、どこまでお話ししたんでしたか？そう、そう、天狗谷窯跡の発掘当初は、磁器創始期の小規模な1基の窯体を想定していたため、調査が何次にも渡るとは考えられていなかったというところでしたね。

ところで、この当時地元では、有田焼創業350周年を控えていることもあり、「天狗谷窯跡」＝「李参平の窯」という声が高くなりはじめた頃でした。もちろん、まだそう結論付けられる材料があったわけではありません。この李参平と天狗谷窯の関わりは、『金ヶ江家文書』にある文化4（1807）年の「乍恐某先祖之由緒を以御訴訟申上口上覚」を、大きなよりどころとしています。金ヶ江一族間の泉山の採掘権をめぐる争いに関する文書で、「其末右唐人（李参平）御含二より、段々見廻り候処、今之泉山江陶器土見当り、第一水木宜故、最初は白川天狗谷二釜を立」と記されています。しかし、200年近くも時代の下る文書で、しかも、先祖の功績によって泉山の支配権の正当性を主張する訴訟関係の文書です。正確に伝承されてきた内容という確証もありませんし、その功績を誇大化や美化していないとも限りません。ですから、地元のアマチュアの郷土史家ならいざ知らず、Proの歴史学者がこれを学術上の根拠とすることを、最初からすんなり受け入れられるはずありません。

そのため、この一次調査に先立つ打合せ会において、三上団長が特に強調されたことがあったようです。

「一、白磁創業期の重要な窯の発掘調査を行うのであって、李参平と安易に結びつける考え方は必ずしも採らない。二、調査にあたっては、窯の床面と、落ちた窯の天井の間に発見された遺物を重視し、ほかの土層から出土した資料と、混同してはならない。」「ことに第二点が守られなければ、有田磁器創業期に関し、従来の諸説に追随するだけに終わってしまう、と念を押した。」

とあります。つまり、この時点では、ややもすれば先走りしがちな地元の盛り上がりを抑えるべく、必ずしも李参平ゆかりの窯跡という先入観で調査するのではなく、純粹に白磁創業期の窯の状況を捉えるという方針だったのです。そのため、窯の最終焼成品であることが客観的に証明できる、焼成室床面や天井部と床面の間の製品とその他の出土製品は明確に区別し、従来の観念的な捉え方とは一線を画すことが強調されたのです。

ところが、なかなかそうした学究的な捉え方を、やすやすとは許してもらえない雰囲気もあったようです。すでに第三次調査の頃には、町の中では“李参平の窯の調査”という機運が高くなっていたらしいのです。(村)R2.2.28



本物のツヴィンガー宮殿（ドレスデン）

有田の陶磁史 (124)

前回は、天狗谷の調査団としては、李参平の窯って安易に結び付けることなく、客観的な視点で調査を行いたいとしたものの、地元では段々それを許さないような雰囲気になってきそうって話して終わってました。続きです。

天狗谷窯跡の二次調査は、昭和 41 (1966) 年 11 月 22 日から 12 月 1 日の 10 日間実施されています。一次調査が昭和 40 (1965) 年の 10 月 29 日から 11 月 11 日でしたので、ちょうど 1 年くらい経ってからのことです。

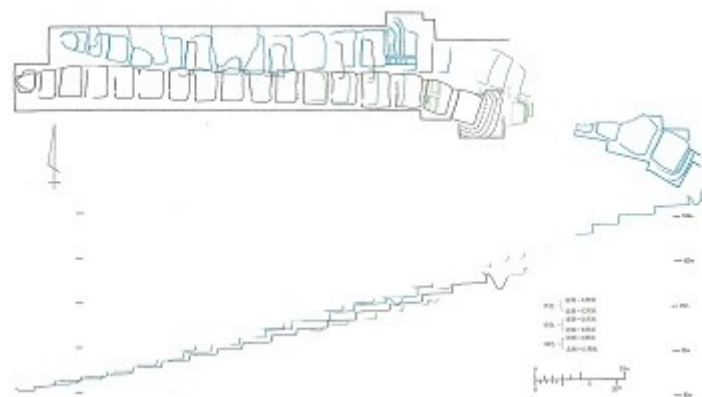
この時には、層位的に A 窯よりも遅れて築かれたことが確実な B 窯、その B 窯のさらに後に築かれた C 窯、そして、部分的な遺存で層位的な新旧が不明瞭な D 窯を中心に調査が進められました。そして、翌昭和 42 年 7 月 5 日から 13 日には第三次調査が実施されたのですが、その前にちょっとした出来事がありました。

町史跡の第 1 号として天狗谷窯跡を指定した有田町教育委員会では、同時に以前調査された稗古場窯跡および近接する天神山窯跡も併せて史跡として指定していました。これらも、李参平と並んで有田焼の創業期を支えた、深海宗伝・百婆仙一族ゆかりの窯というのが事由です。当時、かなり磁器創業ということに、強い関心を抱かれていたということでしょう。そして、続いて第三次調査に先立つ昭和 42 年の 3 月 20 日には、第 4 号として“初代金ヶ江三兵衛 (李参平) 墓碑”を指定したのです。この時の指定事由は、文化財の指定台帳に以下のとおり記されています。

「当墓碑は既に金ヶ江三兵衛 (初代 — 李参平) の碑であろうと言われていたのを、竜泉寺の戒名帳 (過去帳) により昭和 42 年 1 月 21 日池田忠一氏の発見により月日、戒名が確認されたので重要な史跡として指定した。」

つまり、天狗谷窯跡にほど近い共同墓地内には、李参平のものではとされていた「□祖月窓浄心居士 同名三兵衛立之」と刻まれた墓碑があるのですが、新たに龍泉寺の過去帳でも、「月窓浄心、上白川三兵衛靈明曆元年乙未八月十一日」(明暦元年 = 1655 年) の記載が発見されたのです。そのため、信憑性が確認されたとして、急きょ史跡指定されたというわけです。それにしても、過去帳の記載が発見されたのが 1 月 21 日で、3 月 20 日には早々と指定しているわけですから、これは驚異の早さですね。有田焼 350 年の直後ということで、よほど李参平への関心が高かったんでしょうね。

まあ、現在でも 2 カ月で指定することは、やったことはありますので、不可能とは言いませんが、今は手順をきっちり踏んでやらないといけないので、相当慌ただしいのは確かです。いくら、もっと事務手続きが簡素な時代だったと言っても、かなり急いだんだろうとは思います。(村) R2. 3. 9



天狗谷窯跡実測図 (発掘調査報告書より)

有田の陶磁史（125）

前回は、昭和 42（1967）年 7 月の天狗谷窯跡第三次調査の前に、窯跡にほど近い場所にある金ヶ江三兵衛（李参平）の墓碑が急きょ町の史跡に指定されたって話でした。町内は、完全に李参平で盛り上がっています。さあ、どうなるんでしょうか？

これについて、調査主任を務められた倉田芳郎氏は、調査報告書の中で、次のように述べられています。

「昭和四十二年三月二十日、有田町教育委員会が開かれ、その席で、「初代金ヶ江三兵衛（李参平）」墓碑を有田町「史跡」に指定することが決められた。三上団長は有田磁器創業期の歴史的に重要な窯址の調査を行なうという一貫した姿勢をとられているが、この墓碑が奇しくも天狗谷窯址隣接の白川墓地で発見されたこととも相俟ち、李参平の窯の調査という標識を、町としては掲げたく、やや、参平熱に押され気味で、この年の夏を迎えた。」

さあ、えらいことになりそうです。

その前に、じらすわけではありませんが、おそらく、というか、ほとんどの方は、この教育委員会や指定のシステムをご存じないと思いますので、さわりだけ説明しておくことにします。

まず、皆さんが一般的に教育委員会だと認識している組織は、正確には教育委員会事務局のことです。有田町の場合だと、この中に、文化財課と学校教育課と生涯学習課があります。この倉田氏の記述で出てくる「有田町教育委員会が開かれ」とはこの事務局のことではなく、外部から選任される教育委員の方々に構成される会議のことで、だから「開かれ」という表現になるわけです。以前はその責任者は教育委員長でしたが、現在の法律では、教育委員長は廃止されて教育長に一本化されています。

町の文化財に指定する場合は、一般的には、まず、この教育委員会が事務局案に基づいて協議し、指定が妥当と判断した場合は、それを町の文化財保護審議会に諮問します。そしてそこで審議の上答申が出されて、OK ならば、教育委員会が告示して指定が完了というわけです。もちろん、これはごく単純化した手順ですので、実際にはもっと複雑ですが。

再び本論に戻ります。調査団としては、あくまでも当初の方針のとおり、「有田磁器創業期の重要な窯跡の調査」という位置付けで発掘を行いたかったようです。当然ですね。たとえ李参平の墓碑が窯の近くの墓地に所在することが判明しても、それが天狗谷窯と関わったことを証明する直接の材料とはならないからです。しかし、過去帳の発見で勢いづく地元では、「陶祖李参平の窯跡の発掘調査」という認識に急速に傾いていったようです。

それに、当時は知られていなかったのかもしれませんが、その墓碑って、元から白川の共同墓地にあったわけではなく、稗古場から移されたことが分かっています。金ヶ江家は白川から稗古場に移ってますから、その方がむしろ自然ですね。

それにしても、天狗谷窯跡を史跡指定し、物原の発掘を計画していた時に偶然窯体の一部が発見されたり、タイミングよく過去帳が発見されたりと、何とも波乱含みの発掘調査です。しかし、三次調査の衝撃は、まだまだこれで終わったわけではなかったのです。（村）R2. 3. 13



初代金ヶ江三兵衛墓碑